

第4節 山城の構造について

1. 山城研究について

最近の城郭研究は16世紀後半の城郭を中心として、活発な研究が行われ成果をあげている¹⁾。しかしこれは現地に残る遺構から縄張り（防御施設の形態）を読み取ることによって、城郭を比較して成果を挙げているもので、現地の遺構に何ら特徴のない城郭の研究については、まだ積極的な研究が行われていないのが現状である。

このような縄張りに特徴のある城郭は天正年間前後から登場するもので、複雑な縄張り構造や大きな曲輪・土塁・堀切、発達したものでは石垣を持つのが特徴である。

これに対して、それ以前の城郭は中尾城跡をみてもわかるように、横堀・畝状縦堀・枳形、などといった発達した防御施設はともなわず、大半が曲輪を重ねたものや、堀切・土塁を持つだけの小規模な城郭である。

現在の山城研究もこの流れに沿っており、天正年間前後の遺構が中心となっている。まだ、中尾城跡などのような特徴のない城郭をどう扱うかについては明確な方法が確立していないのが現状である。これに対して、各地で行われる城郭の発掘調査はかなりの数に登っており、大半がこの特徴のない遺構である。そして、数多くの調査報告書も刊行され資料は整いつつある。しかし、これらをまとめる機運は未だに活発とはいえない。

16世紀前半前後の山城については「在地性の強い山城、国人領主の所領支配の中枢として機能する城郭、平時の居館に対して戦時に立て籠もる山城という根古屋式城郭の時代²⁾」・「里に近い里山に立地するようになる³⁾。」といわれている。南北朝時代の城郭が奥深い山々に小曲輪を点々と築きゲリラ戦法で戦ったのに対して⁴⁾、応仁・文明の乱以降の城郭は、より在地性が強く領域内を見渡せる小高い山の上に山城を築いたというものである。ここでは、中尾城跡を検討するとによって、16世紀前半の在地性の強い城郭の様相について検討してみたい。

2. 中尾城跡の構造

今回の中尾城跡の調査では、以下ことが判明した。

中尾城跡は5つの曲輪と各々2本の堀切・土塁からなる。曲輪は尾根線上の2つの曲輪（第1曲輪・第2曲輪）が中心的な位置を占め、この両側斜面に3つの腰曲輪（東第1曲輪・東第2曲輪・西腰曲輪）が配されている。土塁・堀切（北土塁・北堀切・南土塁・南堀切）は、この尾根線の前後に設けられ、城内への通行を防いでいる。この他、第2曲輪から東第2腰曲輪へ下りる部分で虎口遺構が検出された。

曲輪内からは、建物（礎石）・溝・土壌が検出された。建物は礎石や柱穴などが検出されていないが、段状遺構・雨落ち溝の存在から5棟が想定復原できた。このうち、第1曲輪の建物が

最も大きく立地などからも中心的なものであると考えられた。第2曲輪の建物は小規模なものが多く、第1曲輪の建物に從属するものと考えられる。東第1腰曲輪のものは、茶磨（茶臼）や天目茶碗の遺物の出土状況から、公的な場所と考えられる。

曲輪の構築は切土と盛土によって行われ、尾根続き方向に軸線を整え、すべてのものが南北方向に近いこの軸に並行か、または直行する形で構築されていた。

曲輪内の空間構成の復原から、第1曲輪と第2曲輪はほぼ対称な方形を意識して構成され、建物の復原は位置からすると建物方向も軸線に合せていること、第1曲輪と第2曲輪との間に通路状の空間が想定できる事がわかった。また、両側斜面のうち、東斜面は、軸線の統一も徹底し曲輪と腰曲輪との段差も1.6mと大きくなっている。さらに虎口遺構も設けられ、城の表側であったことが想定できた。東斜面は傾斜もやや緩く谷底を歩き城の下から登って城内に入ってきたものと考えられる。残念ながら城郭に直接入る虎口を検出出来なかったため、東腰曲輪のどの部分から入ったかは復原出来なかった。

これと逆に、西斜面側は腰曲輪の段が低く、平面図をみてもわかるように、曲輪の縁辺部は軸線が守られていない。地形の制約を受けて軸線を整えることが出来なかったものだが、東側の曲輪のような努力が見られないことは、それほど見栄えの影響しなかった部分であることを窺わせる。東斜面が城郭の表部分となり、西側は裏に相当すると考えられる。

また、西腰曲輪は、土壌の甕や穀物の出土状況から貯蔵庫的な機能を果たした曲輪と考えられる。

遺物は、これまでの山城の例に無く非常に豊富で、曲輪や斜面などのいたるところで出土した。但し、両端の堀切やこれに続くそれぞれの尾根続きからは山城関係のものはあまり出土していない。そして、遺物の出土地点や接合関係をみると、かなり離れて接合したり、遺構・曲輪内や斜面などに関係なく接合しており、これらの遺物が無作為に土砂や廃材と共に曲輪から両側の斜面に捨てたり、土壌などの遺構を埋めるのに用いられており、中尾城跡が最終段階で破却（破壊）されたことが窺えた。

また、山城の機能した時期はこれらの遺物から16世紀前半に位置づけることができた。

そして茶磨（茶臼）・天目茶碗・白磁等の出土、火打金の形態から城の中で日常的な生活を行っていたことが窺え、ある一定期間城郭内で人々が生活したことがわかった。

中尾城跡は前後の堀切の配置や軸線（ライン）の統一などかなり企画性を持った山城であることが読み取れ、防御の部分と中心の曲輪部分が分化した山城であるといえよう。以上のことが調査の結果判明した。

このことから中尾城跡の特徴を列記してみると次のようになる。

- ①. 堀切・土塁、曲輪面積は小規模なものである。
- ②. 堀切は第1曲輪のみに止まらず腰曲輪部分も覆っている。これに沿うように土塁も構築さ

れた。

- ③. 居住空間と防御空間を分化させた、一定の企画のもとに構築されている。
- ④. 一定の企画は、防御施設の曲輪構築にのみ働いているのではなく、曲輪や建物群の軸線の統一という城郭全体のバランス（縄張配置）といったことにも働いている。
- ⑤. 虎口は折れ・空間などの工夫は見られないが、簡単な防御施設を伴うものである。
- ⑥. 縄張りからみると居住空間と防御空間を分化させた、一定の企画がみられるが、実際面の利用では、防御空間を居住空間や食料の貯蔵空間に用いるなどかなり緩やかな使用方法がとられている。
- ⑦. 構築に際しては、切り土・盛り土を多用した土木工事が行われ、大まかな曲輪構築が行われた後、建物など普請部分の平面を確保する細かい造営が行われている。
- ⑧. 遺物の出土量が非常に豊富で多い事などから、戦時のみに応急に旧拵えで築城されたのではなく、一定期間の居住が考えられる。
- ⑨. 立地が尾根の頂きではなく、中腹であること。しかもなだらかに続いている尾根の全く起伏の無い部分に、人工的に堀切・土塁などを作り尾根を遮断している。
- ⑩. 城内への通行が谷底を通過して行われていること。しかも背後の尾根続きを遮断していることから築城意図としては南尾根続きの丘陵の傾きからの眺望をあまり意識しない。
- ⑪. 遺物の分布状況から、廃城時に破却していること。

①は付近でいえば釜屋城の曲輪面積や、大原城の土塁・堀切に比べ小規模である。特に、土塁・堀切の規模が大きく異なっている。

②のような堀切の構造は堀切とそれに続く竖堀として、紹介されていることが多いが、堀切が一定の幅と構造で連なっており途中で断絶が無いことから、中尾城跡の例は実際には一連の堀切として捉えてもよいものと考えられる。

③・④はこの時期の城郭が既に、全体を意識しながら構築していたことを表しており注目される。村田修三氏の上狭川城の考察や地域の小城郭の研究などから、この時期の城郭の縄張りについても若干の考察が行われてきた。中尾城跡では、さらに細かく曲輪内の位置を復原することによって築城者が曲輪構築に当たってどの程度まで意識していたかを解明することが出来た。中尾城跡は虎口構造などに目新しいものもなく、構造としては単純である。しかし築城にあたっては尾根を無作為に削平して建物を建てた城郭ではなく、防御施設と居住空間をはっきりと分けており、そこに確保される空間も意識されたものであった。縄張りとしては面白みのないものであるが、縄張りの工夫が盛んになる依然の城郭として評価すべき遺構である。

さらに、⑤の虎口の存在は、後の発達した構造のものではないが、既に簡単な防御を施した虎口が作られている。腰曲輪の幅の制約によってどうしても一度、折れて上の曲輪に登ること

になるが、意図したことではないと考えられるので1形式⁵⁾の中で捉えられる。

さらに、⑥のように、はっきりとした防御施設と居住空間の分化という築城意図に反して、使用時のゆるやかな使われ方もこの時期の城郭の特徴であろう。

⑦については、後述するのでここでは詳しく述べないが、この構築の加工の度合いが、土木量に反映するため、城郭の特徴を表すのに重要な要素となると考えられる。

⑧～⑪は今のところ、中尾城跡特有の特徴と考えられる。⑧のように、遺物の出土量が豊富であること、立地も本来見晴らしの良い場所で、敵の動きを素早く察知できるような場所でないこと、⑨尾根道を通らず谷底を利用していたこと、⑩破却⁶⁾していることである。

山城に一定期間、居住していた痕跡が中尾城跡に認められたことは、この時期の山城では珍しいことである。16世紀の後半の山城では県内でも、感状山城⁷⁾・置塩城⁸⁾などでは確実に城内を住居としおり、珍しいものではない。遺物量が多いことや出土遺物の検討から、家財道具を持って山に立て籠ったものと考えられ、城の破却と合せてこの城が戦闘に関わったものと考えられる。そして城郭構造が一定の企画に基づいてしっかりと築城されていることから、ある程度戦闘に入る以前に余裕を持って築城する期間があったと考えられる。

また、この山城が谷底道を利用して城内に入っていることは麓の集落や居館（現在場所は不明である。）との結びつきの強いものであったことが窺われる。里に近い里山に立地するといった村田氏の意見の通り、中尾城跡にも麓に居館を持つ根子屋式城郭の1例である可能性が高い。また、立地している尾根が何の変哲もなく、見晴らしが利かない場所である点も、麓の集落や居館から離れた場所を敬遠したために起こった可能性が考えられる。周辺をみても250m～300mの長さで小さな尾根が何本も派生し、麓までだらだらと続く地形である。丘陵の傾きは、当時の人々にとって麓からはやや離れ過ぎた距離であったと考えられ、この地域の城郭と居館・集落との距離を考えるのに貴重な知見と思われる。

中尾城跡で得られたこれらの事柄は、天正年間以前の城郭を把握する上で、これまでの概念をさらに具体的にする意味で重要である。単純な構造・小規模といった説明から一步進んだ説明が可能である。また、現段階では可能性であるが、この城が麓の居館や集落に密接に結びついていた可能性が認められたことも大きい成果であった。

3. 城主について

中尾城跡について、記載された文献は今の所、見つかっていない。中世の文書は勿論のこと、江戸時代に書かれた地誌類の中にも記載した物は見当らない。従って、中尾城跡について直接城主や城の歴史を語ることは文献の上からは全くできない。そこで、ここでは中尾城跡が存在した当時、北摂津地域の状況はどのようなものであったか少し記しておきたい。

北摂地域は室町時代の初期から足利幕府より有馬赤松家に拝領され領地を支配⁹⁾した。有馬赤松家は有馬姓を名乗り三田の車瀬城（後の三田城）本拠とした。しかし、有馬氏は赤松満祐

が起こした嘉吉の乱や、赤松家が政則を擁立して再興された時も行動を別にしていた。応仁・文明の乱には、元家が将軍に義視を擁立しようとした廉で抹殺されるなど、独自に足利家と結びつき行動したようである。

応仁・文明の乱後、守護大名の中で畿内では特に細川氏の「力」が有力になるが、永正4年(1507)から享禄4年(1531)の25年間細川政元の相続争いに始まった細川家の対立と呼ばれる騒乱が続くことになる。この騒乱に有馬氏も巻き込まれたことは確実で、天文23年(1555)には、三好長慶・有馬重則が、別所就治を攻め、逆に大打撃を蒙っている。これは細川家の対立を引き継いだ三好長慶と細川晴元の勢力争いの中で行われたもので、もともと、別所氏は細川晴元派でこれを三好長慶方が攻めたものである。後には別所氏は三好氏の側に付く勢力となり摂津から東播磨にかけては三好氏の勢力が浸透してゆく。有馬氏もこの勢力と無関係では無かったと思われる。

さらに摂津国と北で境を接する丹波国については、永正5年以降、波多野氏が入部し、丹波大山荘に乱入するなど勢力を拡大した。さらに、郡奉行の難波氏を追い高城山に八上城を築くなどして地歩をかためていた。波多野氏は元々は細川晴元についていたため、天文23年(1554)三好長慶は波多野氏を八上城に攻めている。摂津の北部を領する有馬氏は三好長慶方であるため、三田北部に所在する中尾城跡も波多野氏と有馬氏の関係の中で16世紀前半から中頃にかけて摂津と丹波の国境は互いに厳しい情勢になっていたと思われる。前述のような中尾城跡の破却はこの争いの中で行われたものと思われる。

中世の相野地区についてはもともと、守護職領藍荘の存在が知られ(下野皆川文書・森本氏文書)、藍岡山城(藍本字丸山・字城ノ越)の城主、赤松満祐の孫康則が藍姓を名乗り代々荘官となったようである。守護職領ということの有馬氏と森鼻氏の関係はかなり深かったことが窺える。

藍荘の範囲は良く判っていないが、相野という地名からすると、中尾城の所在したこの付近まで一帯を指していたと思われる。

中尾城跡については、丹波焼の出土比率から、廃城時まで、多紀郡今田町を政治的に支配していた勢力、もしくはこれに関わる勢力であると考えられる。先に守護領藍荘の荘域に相野一帯が含まれるとしたが、中尾城跡はこの意味で、丹波焼の流通に深く関わったとされる森鼻氏と深く関わった城であると言えるだろう。後述するが三田の相野周辺一帯には、藍岡山城を中心として山城が非常に分布しており16世紀前半の紛争時に森鼻氏が築いた城郭群であると思われる。

4. 三田市内の城郭

現在、三田市域には41¹⁰⁾の中世の城館が知られる。この内、山城が18、城館が16城、不明7である。ほぼ市内全域に分布しているが、やはり三田盆地周辺に集中するようである。

この内、現状で遺構の概要が判るものや、調査で遺構を確認しているものは、山城では桑原城・大原城・内神城・釜屋城・下井沢城（分布図16）・藍岡山城・青野城・森本城・十倉城・東野上城などがある。館では、稲田城・溝口城・赤松城・赤松氏居館などがある。この他、三田市周辺にある茶臼山城や車瀬城も中世城館としては良い資料であったと思われるが、茶臼山城の遺構は現在は失われて無く、車瀬城も三田陣屋の築城に伴って遺構は消滅した。

このように、三田市内の城郭は最終的には、車瀬城を改修して築城された、九鬼藩の三田城のみが陣屋として近世まで残される。ではそれ以前の中世城郭はどのようなものだったのだろうか。ここでは構造上の特徴から山城について概要を述べて見たい。構造上の特徴と言うのは縄張りの所で述べたとうり、城郭の大型化が16世紀後半から始まるということをとらえて、曲輪・堀切・土塁の規模、防御上の構造などがこれに伴って発達してくるということである。三田の城がこの発展段階にどのような経過を辿るかは、現段階では調査例も少なく不明な部分が多いが、ここでは中尾城跡との位置付けから整理してみたい。

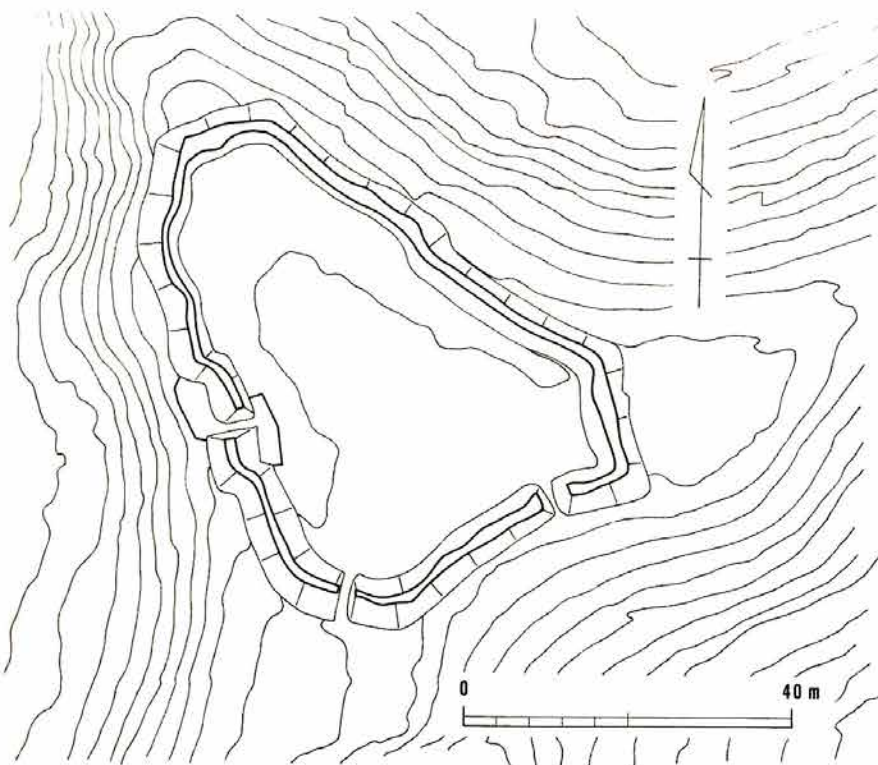
①三田市内の山城を概観して特徴的なことは、城域全体を囲む意識の有る遺構の存在が挙げられる。代表的なものは、釜屋城は周囲を土塁で囲み曲輪内部の削平は不である。逆に内神城は周囲を土塁と堀で囲み、内部は小区画の曲輪群が存在する。しかし、内神城は中世の城郭をそのまま取り込んだ構造と考えれば、釜屋城と同一の意図で改修されたものと推定される。

②次のタイプは大原城に代表されるものである。やや広い曲輪とこれを防御する大規模な堀

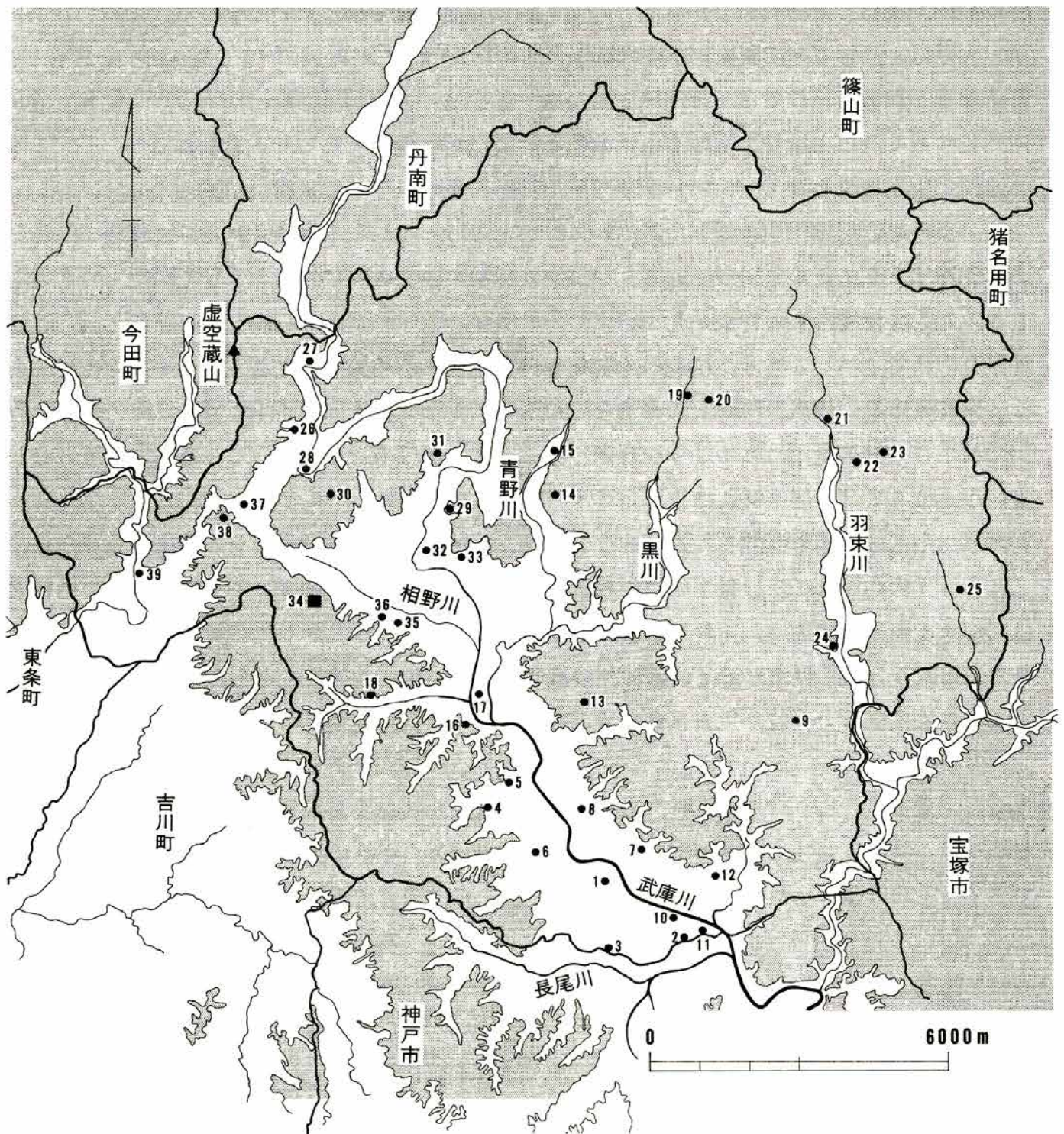
切、そしてこれとセットになる大きな土塁からなる山城である。このタイプの山城は、市内では、大原城のみであるが、付近には板井城¹¹⁾（多紀郡西紀町）・松原城（神戸市北区道場町）の例がある。

③最後のタイプが中尾城跡に当てはまるもので、曲輪や堀切・土塁が小規模で、構造の単純なものである。

また、曲輪が大きくても元々の地形から広いもので、周囲に顕著な防御施設を持たない中西山砦・藍岡山城・青野城・下井沢城・森本城・十倉城・東野上城などがある。この山城の形態は、ばらばらなものが多く統一がとれていない。しかし、土塁



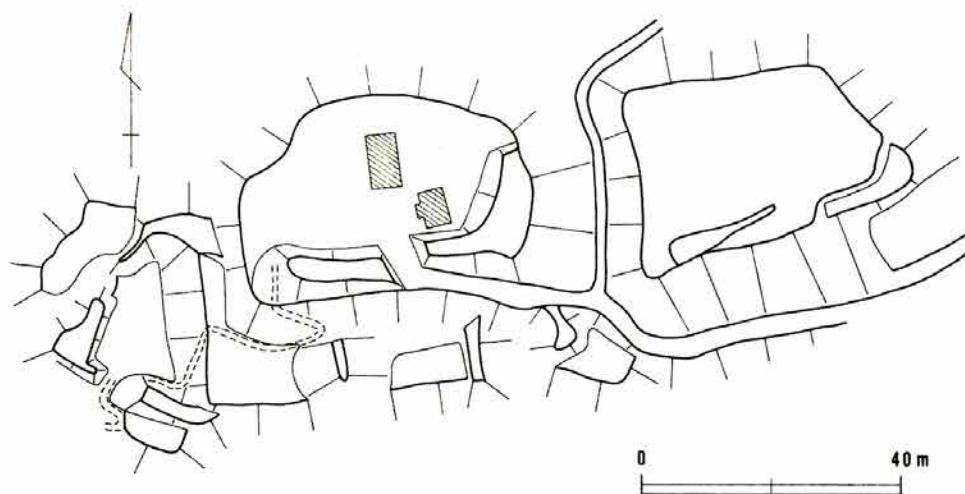
挿図117 釜屋城（三田市貴志）



- | | | | | |
|-----------|-----------|----------|-------------|----------|
| 1. 車瀬城 | 2. 立石城 | 3. 横山城 | 4. 釜屋城 | 5. 前中屋敷 |
| 6. 稲田城 | 7. 茶臼山城 | 8. 大原城 | 9. 香下城 | 10. 下田中城 |
| 11. 山崎城 | 12. 桑原城 | 13. 東野上城 | 14. 青野城 | 15. 大町居館 |
| 16. 下井沢城 | 17. 下井沢城 | 18. 内神城 | 19. 乙原城 | 20. 増田居館 |
| 21. 高平田中城 | 22. 十倉城居館 | 23. 十倉城 | 24. 木器城 | 25. 北畠居館 |
| 26. 藍岡山城 | 27. 藍丸山砦 | 28. 曲り城 | 29. 森本城 | 30. 穴口城 |
| 31. 本庄丸山城 | 32. 烏山城 | 33. 赤松居館 | 34. 中尾城 | 35. 殿元城 |
| 36. 溝口城 | 37. 相野丸山砦 | 38. 古城砦 | 39. 一長右衛門屋敷 | |

挿図118 三田市域の中世城館の分布

は1m前後、堀切は幅3～4m、深さ2m未満のもので、曲輪の広さも中尾城跡の第1曲輪までのものが主体である。その他、城全体を囲むようなプランも存在しない遺構である。これらの山城は城郭の大型化・防御施設の発達・居住空間よりも軍

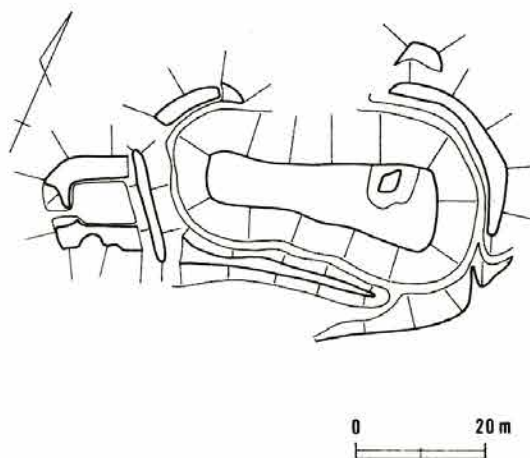


挿図119 大原城（三田市川除）

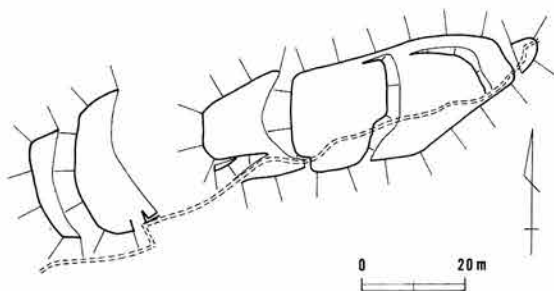
事的側面の優先といった16世紀後半の城郭の意識からは外れており、タイプとしては古い物と考えられる。

①と②のタイプの山城は三田盆地及びその周辺に集中している。車瀬城時代も中世段階では①か②タイプに含まれる山城であったと考えられる。

③のタイプは市内全域に分布している。しかし特に、山城は相野周辺の摂津・丹波国境にやや集中が見られる。藍岡山城を初め、藍丸山砦・曲り城・穴口城・相野丸山砦・古城砦・中尾城跡である。これらの城郭の構造は調査例がないため中尾城跡以外は不明であるが、藍岡山城などの曲輪の構造を見ると中尾城跡に近いものである。残念ながら現状では防御構造と居住空間の分化が明確に意図された城郭であったかどうかは不明であるが、小曲輪構造・小規模な堀切などから③タイプの城郭と捉える事が出来る。③タイプは他に三田盆地にも桑原城・東野上城・下井沢城、そして木器城・十倉城・森本城・青野城・本庄丸山砦などが市内を深く入った谷に点在して分布している。これらの山城の中で、桑原城（三田市桑原）は規模が大きく三田盆地を東から睨む丘陵上に立地する。3つの曲輪を2本の浅い堀切で分断した構造で部分的に腰曲輪を残している。北側尾根続きは一旦低くなり、馬の鞍状を呈しており桑原城は独立丘陵に選地した格好となっている。曲輪の面積は中尾城跡より少し広く、広さからいえば大原城に近いものがある。しかし、堀切の規模または防御施設の発達が見られないことから③に分類できる。そして、規模からいえば中尾城跡や藍岡城よ



挿図120 森本城（三田市東本庄）

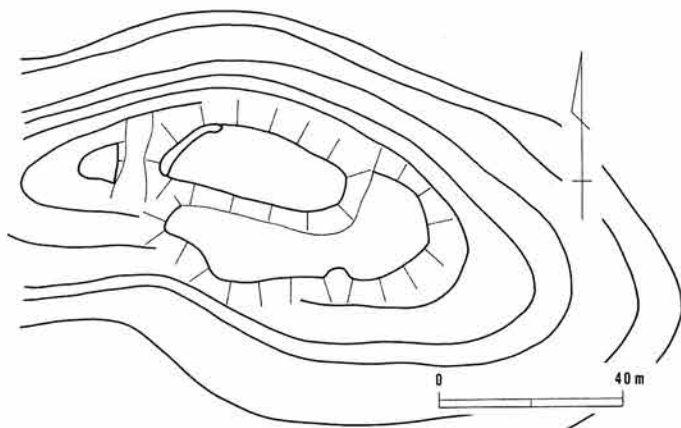


挿図121 東野上城（三田市東野上）

時期は不明である。十倉城・青野城・木器城・本庄丸山砦などの山城はこれらのものよりさらに小規模な山城である。また、先程紹介した相野周辺の山城でも中尾城跡や藍岡山城を除いたものはこの小規模なグループに入ると思われる。この城郭の1つ、十倉城では長さ10m、幅7～8m程度の曲輪が頂に築城され、非常に小さい堀切が尾根続きに1本設けられていた。他の構造も大体よく似た程度である。このように③の山城は16世紀前半の遺構で、3つの規模に別れるようである。これらの多くは藍岡山城・十倉城・森本城などのように麓に居館を設けており、それぞれの土豪の階層を示す可能性もある。但し、相野周辺の曲り城・藍丸山砦などは砦の名が示すとうり丹波に備える臨時的な城の可能性もある。又、今回中尾城跡が分布調査によって発見されたように遺構が増える可能性もある。従って城郭の数が土豪の数を反映していない。

以上のように、三田の山城は巨大なものではなく、①・②・③に分類される。

③については三田市内で3つの規模に別れ、そしてこれらの山城は16世紀後半に①・②のグループに集約され、近世に到って三田城に統一されると考えられる。最終的には三田の山城は③→②・①を経て三田城に統一された。



挿図122 藍岡山城（三田市藍本）

り上の権力が作ったもので赤松家に関連した城郭であろうか。東野上城・下井沢城は三田盆地の西の外れにあって、武庫川のそれぞれ右岸と左岸に立地している。中尾城程度の曲輪を何段か重ねた構造に下井沢城は堀切を組み合わせている。森本城は頂上に細長い曲輪と前面に一段曲輪を配した構造である。

周囲を堀状のものが囲むがこの構造の

5. 兵庫県の山城発掘調査例

兵庫県内でも開発が近年山間部に及ぶことが多く、山城の調査例が増加している。しかし、発掘調査は部分的なものが多く、その遺構全体について明確にできる調査例は限られており、資料はまだまだ少ないのが現状である。これらの調査の中でも、調査面積が広く、顕著な実績が上がっているのは、備後衆山砦¹²⁾（豊岡

市)・尼城¹³⁾(豊岡市)・釜屋城¹⁴⁾(三田市)・福西砦¹⁵⁾(村岡町)・感状山城(相生市)などと限られている。

さらに、発掘調査が行われているものの内、構造や遺物から時期のわかる山城についても限られている。天正年間前後の遺構は備後衆山砦・釜屋城・感状山城(相生市)、そして三木城の付城と言われる君ヶ峰城¹⁶⁾(三木市)、同じく三木城の砦である、鷹ノ尾砦¹⁰⁾(同左)などがある。

ここで問題としている、16世紀前半の中尾城跡の時期に近いものは福西砦・衣笠山城¹⁸⁾(豊岡市)・亀ヶ崎城(同左)¹⁹⁾・内場山城²⁰⁾(西紀町)・網掛城²¹⁾(丹南町)・水尾城²³⁾(西脇市)・鷹尾城²³⁾(芦屋市)などが考えられる。

検出されている遺構を概観すると、曲輪構造では備後衆山砦で堀切、そして堀切に架けられていた橋の足場の遺構が検出された。また土塁の曲輪内側に列石が使用されていた。堀切の規模も幅8m、深さ1.75mと大きい。

堀切は福西砦・亀ヶ崎城・軽部城²⁴⁾(養父町)・中西山砦²⁵⁾(三田市)などで検出されている。

しかし幅は3～4m前後のもので深さも1m未満のものが多い。中尾城跡でも土塁を取り払った比高差は1m前後と考えられる。中西山砦では堀切とこれにともなって堀切に沿って土塁が検出された。堀切の底はややU字である。

虎口遺構の検出は、釜屋城と尼城でそれぞれ1例ずつ検出されている。釜屋城は1つの曲輪全体を土塁が囲んだ構造であるが、土塁の3か所が開口しているが東側のものに横矢掛かりが見られ当時の虎口と考えられる。尼城のものは曲輪の中央部分を横断する形で通路を設けたもので虎口構造としては珍しいものである。

曲輪内部の構造については、芦屋城(浜坂町)・亀ヶ崎城・備後衆山砦・尼城・鷹尾城(調査は山麓部分である)で掘立柱建物、福西砦・君ヶ峰城・感状山城などで礎石建物が検出されている。さらに尼城では堅穴状遺構も検出され、通常の掘立柱建物と堅穴を掘ってその上に小屋掛けした構造の建物の2種類が検出された。鷹尾城と備後衆山砦の掘立柱建物は山城の斜面や山下から検出されたもので山城と関連すると考えられる建物である。

礎石建物では、感状山城での検出例のほか、君ヶ峰城でも簡単な河原石を用いた礎石建物が検出されている。16世紀前半のものでは、福西砦で検出されている。2間×6間の規模の建物が検出されており、焼けた礎石に残った柱痕跡から直径20～30cm前後の柱を使った建物であることが復原できた。この時期の山城では大阪府泉南郡岬町の井山城²⁶⁾でも礎石建物が検出されており、掘立柱建物と礎石建物が共存していた時代であるといえる。

また、山城全体の様相がわかる調査例は、釜屋城と福西砦そして中尾城跡の3例がある。釜屋城は全体を土塁で囲み、曲輪内部をほとんど加工していないものである。福西砦は逆に瘦尾

根上を3本の堀切で遮断し、小さな曲輪に幅一杯の建物を建てた構造の山城である。このように個々の遺構については類例が蓄積されつつある。しかし、山城調査では、曲輪内部の調査に重点が置かれ、斜面や、更に築城段階の調査の断ち割りを行っていないものが多い。このために曲輪内の遺構については報告されているが、曲輪周辺にどの程度の加工が行われているか明確になっていない調査が多い。現状では曲輪内部のみの遺構の比較や外面的な規模の比較しか行えない。

第28表 兵庫県山城発掘調査一覧表

No.	城 名	所 在 地	調査年度	調査組織
1	福 西 砦	美方郡村岡町村岡	1978	兵庫県教育委員会
2	衣笠山城	豊岡市三宅、河谷、中の谷	1975	豊岡市教育委員会
3	亀ヶ崎城	豊岡市	1981	豊岡市教育委員会
4	備後衆山砦	豊岡市日撫	1977	豊岡市教育委員会
5	尾 城	豊岡市岩井	1987	豊岡市教育委員会
6	芦 屋 城	美方郡浜坂町芦屋	1982	浜坂町教育委員会
7	軽 部 城	養父郡養父町上野	1986	養父町教育委員会
8	田 和 城	養父郡大屋町	1984	大屋町教育委員会
9	高 城	豊岡市気比	1987	豊岡市教育委員会
10	和田山 I P	和田山町	1981	兵庫県教育委員会
11	網 掛 城	多紀郡丹南町網掛	1986	丹南町教育委員会
12	内 場 山城	多紀郡西紀町下坂井	1985	兵庫県教育委員会
13	中 尾 城	三田市下相野字中尾	1986	兵庫県教育委員会
14	釜 屋 城	三田市貴志	1982	兵庫県教育委員会
15	中西山城	三田市西野上	1982	兵庫県教育委員会
16	中道子山城	加古川市志方町岡	1988～	加古川市教育委員会
17	水 尾 城	西脇市	1988	西脇市教育委員会
18	感 状 山城	相生市矢野町森感状山	1984～	相生市教育委員会
19	鷹 尾 山城	芦屋市城山	1982	芦屋市教育委員会
20	鷹ノ尾砦	三木市鷹の尾	1985	三木市教育委員会
21	君ヶ峰城	三木市君ヶ峰	1987	三木市教育委員会

6. 総括

以上、中尾城跡の構造と、周辺の山城、県内の発掘調査などについて概括したが、最後に簡単に中尾城跡について総括してみたい。

中尾城跡の性格については、次のようなことが考えられる。

①企画性のある縄張りを持ち、防御機能と住居空間が分離しているなど、天正年間前後に登場する遺構の性格を持ちながら、城内の使用にあたっては必ずしも2者を分離した使用はしていない。

②曲輪構造や堀切・土塁などは非常に小規模である。そして曲輪を建物などの段造成のためにさらに細かく区画している。

③麓の集落や居館と密接に結びついて、谷底道を利用したり、尾根続きの中腹に立地するなどの特徴が見られた。

山城の時代ごとの変遷に従えば、南北朝時代の城郭は里から離れ、奥深い山の中に点々と小曲輪を築くものが多いという。このタイプの城郭は少なくとも嘉吉の乱で赤松満祐が立て籠った城山城の時期、15世紀中頃までは存在している。この時期の山城も概念的な捉えられ方しかしていないが、明らかに中尾城跡はこの時期の構造とは異なっている。

そして、16世紀後半の天生年間前後以降の城郭とも、いろいろ述べてきたように大きく異なった構造である。

その構造はこれまで漠然とはあるが述べられてきた、16世紀前半の山城についての構造である。そして、中尾城跡の調査は時期を明確にできたことによってこの漠然としたイメージを補足して説明する材料を提供したと考えている。

註1) 現地の城郭遺構の縄張りを読み取り、城郭を通して当時の地域の政治構造を解明しようとする動きで、村田修三氏・北垣聡一郎氏・中世城郭談話会・中世城郭研究会などを中心とした人々の研究によっている。

2) 村田修三「中世の城館」『講座 日本技術の社会史 土木 第六巻』日本評論社1984

3) 同上文献による。

4) 村田修三「戦国期の城郭」『国立民族博物館研究報告 第8集 一共同研究「中世の地方政治都市」』国立民族博物館1984

5) 千田嘉博「織豊系城郭の構造」『史林』第巻号 京都大学文学部史学1987の編年案による。

6) 破却は、後には城割りと呼ぶ。意識的に城郭を破壊するもので、代表的なものは、徳川幕府による一国一城令である。戦国時代にも一般的に行われており、落城後敵兵が破壊するものや、城兵が城を捨てる場合に破壊する例がある。戦国時代は何れも戦乱に関わった城郭で行われている。

7) 『感状山城跡』・『感状山城跡II』相生市教育委員会 1984・86

8) 「置塩城」夢崎町教育委員会 1986

9) この項目の歴史上の事柄については、『兵庫県史 第3巻 中世編』兵庫県史編纂委員会 1978によった。

10) この頃の文章に登場する城郭は原則として、『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』兵庫県教育委員会1982によっている。但し、釜屋城は『北摂ニュータウン内遺跡発掘調査報告II』兵庫県教育委員会 1983、下井沢城の山城については北摂津ニュータウンの分布調査に

よって発見されたものである。中尾城跡については前述のとおりである。尚、川除城・松下城・四ツ塚城については紹介されているが所在が不明なため分布地図からは省いている。

- 11) 同上『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』による。
- 12) 『日撫・備後衆山砦』豊岡市教育委員会 1987
- 13) 『本井墳墓群・尼城址』豊岡市教育委員会 1988
- 14) 『北摂ニュータウン内遺跡発掘調査報告Ⅱ』兵庫県教育委員会 1983
- 15) 『福西砦跡現地説明会資料』兵庫県教育委員会 1977
- 16) 宮田逸民氏の教示による。
- 17) 『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』兵庫県教育委員会 1986
- 18) 『シンポジウム但馬の城 資料 山城とその時代』但馬此隅山の保存を進める会・但馬史研究会・但馬考古学研究会 1987
- 19) 同上文献による。
- 20) 『内場山城跡現地説明会資料』兵庫県教育委員会 1986
- 21) 西紀・丹南町教育委員会 芦田 茂氏・西田辰博氏の御教示による。
- 22) 西脇市教育委員会 岸本一郎氏の御教示による。
- 23) 『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』兵庫県教育委員会 1985。「城山南麓A地点」の調査成果による。
- 24) 『井山城跡』大阪府埋蔵文化財協会 1988